農林水産大臣賞受賞

田舎から世界へ商品を！世界から田舎へお客さんを！

受賞者　多治見三郷活性協議会（たじみさんごうかっせいきょうぎかい）

（岐阜県多治見市（たじみし））

■　地域の沿革と概要

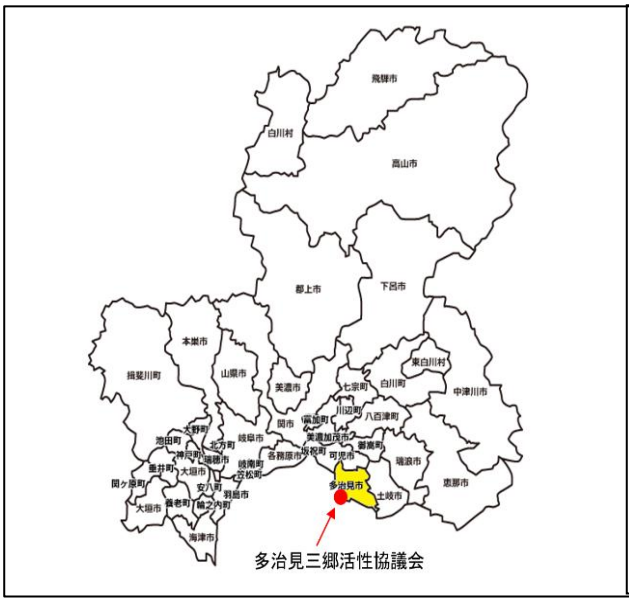
多治見市は、愛知県との県境、名古屋市から北東約 36 ㎞に位置し、愛知県の春日井市、瀬戸市、犬山市及び岐阜県の土岐市、可児市と接する都市的地域である。

主要特産品として陶磁器（美濃焼）が有名であり、隣接する土岐市、瑞浪市と合わせ、国内陶磁器生産量の約５割を占めている。

耕地面積は 206ha で、うち田が 176ha、畑 30ha である一方、山林が 4,449ha となっており、山林が大きな割合を占めている。

多治見市の主な農産物は水稲であるが、自給的農家が県平均の 53%を大きく上回る 75%を占めており、農産物の特産品及び産地は存在しなかった。

第１図　位置図



第１表　地区の概要

事　項	内　容	
地区の規模	集落の集合体	
地区の性格	機能的な集団等	
農 家 率 （内訳）		0.9%
	総世帯数	41,446戸
	総農家数	360戸
専兼別農家数 （内訳）		
	専業農家	20戸
	1種兼業農家	0戸
	2種兼業農家	52戸
農用地の状況 （内訳）	総土地面積	9,125ha
	耕地面積	206ha
	田	176ha
	畑	30ha
	耕地率	2.3%
	農家一戸当たり耕地面積	0.6ha

注：多治見市全体の数値（H27 年）
専兼別農家数は販売農家内数のため、総農家数と一致しない。

■　むらづくりの概要

１．地区の特色

多治見三郷活性協議会は、その多治見市の南西部に位置する「三郷（さんごう）」の愛称で呼ばれる３集落（廿原町（つづはらちょう）、三の倉町（さんのくらちょう）、諏訪町（すわちょう））からなり、それぞれが山に囲まれた盆地にある小

集落で、都市近郊にありながら昔ながらの農村風景を有しているが、近年、高齢化と人口減少が進んでいる。

２．むらづくりの基本的特徴

（１）むらづくりの動機、背景

これまでこの地域では、各集落が独自に、限られた農地を活用する取組を行ってきた。

廿原集落は、小規模兼業農家の集落で、主要作物もない状況であったが、行政の協力の下、全農家 38 戸の合意及び出資により、平成 10 年に「(有)廿原ええのお」を設立した。

写真１　廿原集落の観光農園

同組織では、集落内の農地を一括して集積・管理するとともに、効率的で高付加価値ないちご、ブルーベリーなどの新規園芸作物を導入し、都市部から１時間圏内という立地条件を生かして、都市住民との交流及び収入の獲得を目的とした観光農園を開設している。

観光農園は、平成 14 年にブルーベリーの体験農場を開園（期間：７月中～８月末）し、平成 22 年にはいちごの体験農場も開園（期間：12 月～３月）しており、平成 30 年の年間来客数は、ブルーベリーは４千人、いちごは２万７千人、総売上げは約７千万円となっている。

さらに、平成 23 年に他地域から「(株)もみじかえで研究所」が参入し、新規就農者として集落内の耕作放棄地でもみじの栽培を開始、もみじ葉を利用したお茶や、もみじエキスを使ったサイダーなどのもみじ加工品を商品化しており、これらは多治見市の新しい特産品として認知度も上昇しつつある。

写真２　もみじ加工品

三の倉集落は、全農地面積が約 2.0ha で、19 戸の農家により平成 16 年に設立された「(有)池田南ええのお」が、主に自家消費用米として水稲を生産している。

諏訪集落は、全農地面積が約 9.6ha、農家数は 37 戸あるが、兼業農家が多く、農地の利用率は低い状況にあった。

このような状況の中、廿原集落を中心に集落の枠を超えて、地域資源を活用し、「収益の向上」や「地元雇用の創出」、「都市住民との交流」による地域活性化を図るため、平成 27 年度に「多治見三郷活性協議会」が設立された。

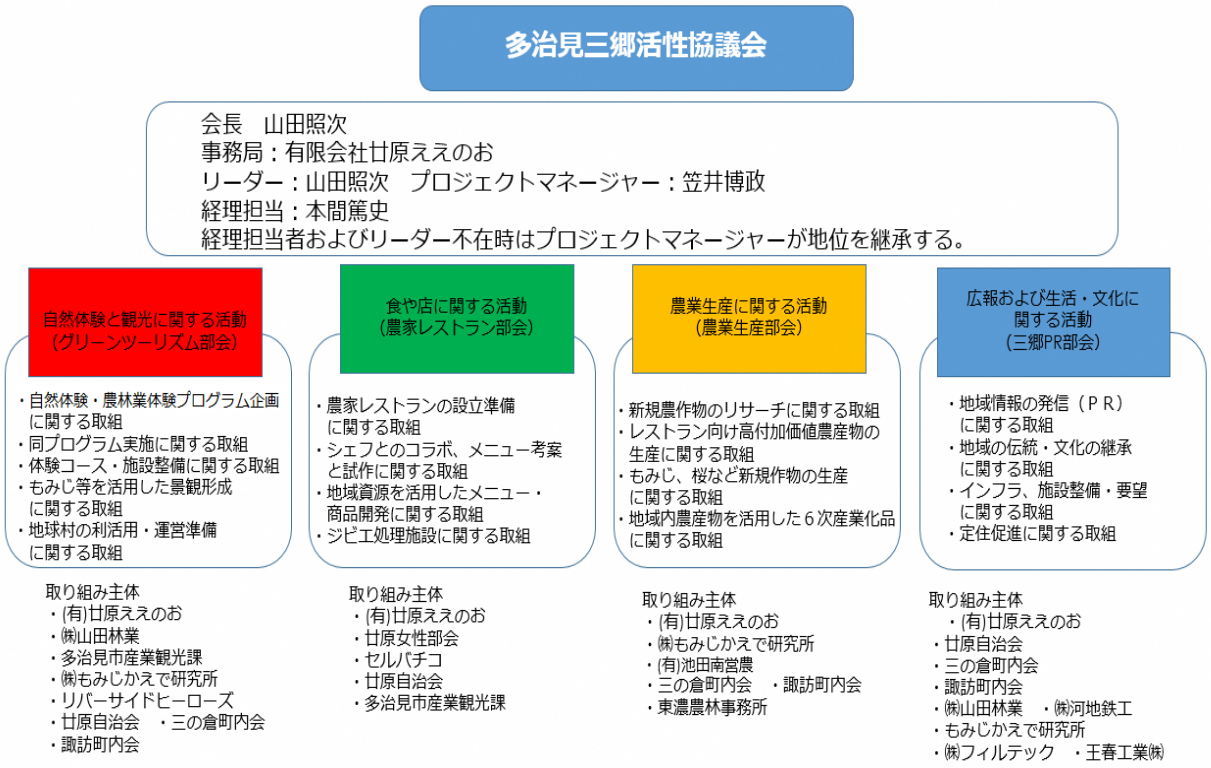
（２）むらづくりの推進体制

協議会は、総合プランニングに特化した外部有識者をプロジェクトマネージャーとして招き入れ、助言を受けながら毎月の定例会議やワークショップを開催、「若者・女性・高齢者が活躍する場の提供」、「地元雇用の創出」、「安定的な収益の確保」に向けた取組を明確化した「多治見三郷地域の将来ビジョン」を作成し、具体的な取組の目標設定を行っている。

ア　当該集団等の組織体制、構成員の状況

協議会は、地域住民、農林業者の他に地域に関連のある企業などで構成されている。またグリーンツーリズム、農家レストラン、農業生産、三郷ＰＲの４つの部会が設置され、高付加価値のある農産物づくりとその活用、自然環境を生かした体験プログラムの創出による集客など「多治見三郷地域の将来ビジョン」の実現に向けて取り組んでいる。

第２図　むらづくり推進体制図



イ　当該団体と連携してむらづくりを行う団体及び行政との関係

協議会では、廿原女性部会、岐阜県東濃農林事務所、現地産業廃棄物業者の(株)フィルテック及び河川自然環境保全復元団体リバーサイドヒーローズなどの団体が連携しつつ、それぞれの特色を生かした活動を推進している。

フィルテックとは地域貢献、環境配慮及び地域住民との良好な関係構築のための話し合いなどを行い、地域が共同でお互いの特色を生かして活性化できる仕組みを構築しつつある。また３集落とも自然環境への意識が高く、多治見市環境課やリバーサイドヒーローズの支援を受けながらビオトープの保全活動を実施している。

■　むらづくりの特色と優秀性

１．むらづくりの性格

協議会は、三郷の名のとおり、集落の枠を超えた組織形態であり、それぞれの地域がその特色を生かした役割分担のもとに活動を展開している。

また、毎月定例会議を開催することで、地域全体が団結し、三郷の交流活性化のための良いコミュニケーションの場となっている。

さらに、既存の知識にとらわれることなく、外部の有識者から地域の実態に即した指導を仰ぐとともに、時代の最先端を担っている者や施設に出向き、活動に必要なノウハウやトレンドを吸収している。

２．農業生産面における特徴

（１）協議会の農業生産、流通面の取組状況

ア　廿原新規農作物導入

廿原集落における新規農作物を導入するため、東京のトップシェフ 18 人を訪問し、ヒアリングを実施、マイクロ野菜やもみじエキスなどを持ち込み、素材についての高い評価を得た。

写真３　市場価値の高いマイクロ野菜

また、どのような素材が要求されるかなどの意見交換により、今後につながる良好な関係を築くとともに、リクエストが多かったマイクロ野菜を導入し、レストランの需要に即した野菜の栽培を実施している。

もみじについてもシェフの間で評判が良く、展示会などでもオファーがあり、生産が間に合わないほど人気があることから、もみじ生産を増強することとなった。

これらの取組により、新規就農者２名とパート雇用６名が創出された。

イ　三の倉・諏訪有機農作物栽培

地域の新しい農産物を創出することを目的に、西洋野菜及び伝統野菜の導入に着手した。県の技術指導や視察により有機野菜の栽培知識や需

要を把握するとともに、野菜を栽培するために約 50a の耕作放棄地を解消し、堆肥の施用等土作りを行った。

また、地元カフェで使用する野菜の栽培を行うため、栽培時期やパンへの利用のしやすさなどを考慮して、アスパラガスやキャベツなど 10 種類を選定し、種苗や必要資材を購入して試験栽培を実施することにより、野菜の生育の良し悪しや土壌環境の状況を把握し、地元カフェで使用する野菜の生産に向けた準備を行っている。

ウ　地域食材のＰＲ活動

地域農産物のＰＲを行うため、経済市場の中心である首都圏、関西圏での展示会への出展を継続して実施しており、新たな顧客の確保が図られている。

2017 年に東京ビックサイトで開催された「国際ホテルレストランショー」や 2018 年に大阪で開催された「ファベックス関西」に出展。

また、2018 年に東京・代官山で開催された「プレミアム食材フェア」に参加した際には、三郷地域で生産された野菜で料理を試作し、当地域の野菜についての評価を得た。そのイベントには、東京のレストランを代表するトップシェフの方々が訪れており、その場で提供された料理の試食を通じて、プロの視点からの様々な意見を得ている。

写真４　展示会への出展の様子

（２）協議会による生産力の向上、生産の組織化、生産・流通基盤の整備等への寄与状況

廿原集落では、マイクロ野菜の生産基盤の整備が順調に進んでおり、栽培のノウハウも蓄積されつつあることから、安定した生産が行われている。

また、もみじ生産も規模拡大が進んでおり、県の補助事業を活用した加工施設も充実している。

三の倉集落では、女性部会が開発した天然酵母パンを製造するパン工房の運営主体として、「一般社団法人フォーレサンノクラ」が設立され、今後の発展が期待されている。

諏訪集落では、地元カフェへの食材供給地としての役割を担うための生産活動が進んでいる。

流通基盤の整備は、地域特産品の販売促進を目的として、協議会のウェブサイトを構築し、地域の取組を紹介し、商品購入に結びつけている。

３．生活・環境整備面における特徴

（１）生活条件の改善・整備、コミュニティ活動の強化、都市住民との交流等への寄与状況

三郷の良いところを一年かけて取材し、ワークショップや定例会議で提案された地域の観光マップを 3,000 部作成するとともに、多治見市で毎年開催される「き」業展に出展し配布することで、新しい取組や特産品について多治見市民の認知度を向上させている。

また、三郷地域が有する自然や、市の施設などを生かした観光を創出するため、インタープリター（自然ガイド）で、自然体験プログラムの実施に携わっている有識者から講習を受け、実際の現場に即した意見を数多く取り入れた。

さらに、講師とともに三郷地域内を散策するフィールドワークを実施するなど、今後の都市住民との交流プログラムへつなげていく参考となっている。

写真５　散策ツアーの様子

一方、三の倉集落にある多治見市の施設「地球村」では、アウトドア、ログハウスでの合宿、スポーツ、野外学習等の幅広い活動を展開している。

この施設との協力体制を構築することにより観光クラスターを創出し、都市住民との交流促進を図ることが可能となりつつある。

なお、平成 29 年度から行われている、愛知県春日井市と多治見市の交流促進事業には、都市住民との交流促進活動として多治見三郷活性協議会も携わり、地域で生産されるいちごの摘み取りや、集落散策メニューを提供している。

（２）地域への定住促進、女性の社会参画の促進状況等

観光農園で雇用されている 30～40 歳までの女性で構成される女性部会は、観光農園の開園期以外の収益が無く、また年間４ヶ月の雇用であることから収入が不安定であったが、以下の活動に取り組むことにより、新たな雇用の創出、女性の社会参画が図られつつある。

ア　農家レストラン設営準備

農家レストランのメニュー監修を地元レストランのシェフに依頼し、地区内にある市の施設「地球村」において、農家レストランのプレオープンを１日のみ開催した。

地元の竹を容器として利用した地元ならではの演出を行い、料理はマイクロ野菜やもみじを用いたメニューとして、来客した120人へのモニタリングを行い、意見や要望を基に改善点を検討した。

また、女性部会の中心メンバーで、マイスター工房八千代（兵庫県）を訪問し、女性が年齢にかかわらず働くことができる仕組みと環境作りを学んだ。

写真６　農家レストラン
プレオープンの様子

イ　パン作り

有名なパン職人の下で学んだ女性を講師として招き、主に女性部会を対象としたパン教室を開催した。

地元農産物のブルーベリーやいちごなどから自家製天然酵母を作る方法や、地元で収穫した葉物野菜などをトッピングしたパンを作るまでの一連の工程を学び、６品目のパンの試作を行うなど、パン作りのノウハウを習得した。

写真７　地場産いちごを
使用したパン

その後、三の倉集落にあった漬物工場跡の施設を活用し、パン工房「森の天然酵母パンforet（フォーレ）」を開始、平成30年には法人化し、完全受注生産で10種類の天然酵母パンを製造・販売している。